

親鸞聖人の人間観

——特にその罪惡性について——

菊 藤 明 道

宗教的世界における人間観は、決して客観的（對象的）、分析的乃至一面的な人間の見方を意味するものではない。また、哲學的思索や道德的人間省察によつて把握されるものとも異なるものである。それは、どこまでも、主体的、全体的、根源的でありつつ、しかも個が、個そのものにおいてでなく、絶対なる宗教的真理によつて個の如実相が赤裸々に露呈せしめられるところに、自ら知らしめられる人間存在の根源よりの覚知であるといえよう。

一切の自力的はからいを捨て、ただひたすら如来の本願海中に身を浮かべ、その絶対救済にあずかつた自己を限りなく慶喜した親鸞は、自己を、そして人間をどのように見たか、またその人間観の持つ本来的意義について考察してみたい。

一、一般に、親鸞は極めて徹底した罪惡觀をうち出したといわれる。それは、従来の浄土教的な人間観——特に善導・源信・法然等に見出される罪惡觀をうけながら、しかもそれを

超えて、時代思潮としての末法思想を自己の現實存在の上に主体的に把握する中に、限りなく深化せしめられたものと考えられるが、その罪惡觀は本来的に如何なるものであつたか。

親鸞はその和讃においての後には「よしあしの文字もんじをもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを 善惡ぜんあくの字しりがほは おほそらごとのかたちなり」と詠まれている。善惡に對する人間のはからいを否定したこの歌は、まさに宗教的世界の窮極点に至り得て初めて湧き出るものであり、理性的、道德的世界を超えた宗教的世界からの表明であるといえよう。それは、詳しくはどのような内容性を持つものであるうか。

カントは、人間の根源惡（das radikale Böse）を認知しつつも、人間の本性における善の根源的素質——その最高のものは「道德律に對する尊敬の感受性」といわれる「人格性の素質」[die Anlage für die Persönlichkeit]である。（*Rel.*, S. 27）

―をもつて、たとえそれが悪への性癖によつて曲げられようとも、どこまでもそれに対抗し、うち克つて本来の善に近づくよう努力しなければならぬとする。また仏教も、「七仏通戒偈」において「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」と基本的に人間の不断の努力性が強調される。

然るに、親鸞は、「……本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆへに」(『歎異抄』第一章)と宗教的絶対善をただ念仏のみに求め、善惡をはからうことを以て「おほそらごと」と断ずるのである。かかる自己のはからいによる善惡の処理を以て誤りと断ずることは、親鸞の宿業観にも関連するところであらう。『歎異抄』十三章に示されるごとく「よきところのおこるも宿善のもよほすゆへ」であり「惡事のおもはれせらるるも惡業のはからふゆへ」であり「卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりも、つくつみの宿業にあらずといふことなし」と見たのである。かかる宿業観は、正像末和讃に示される徹底した親鸞の末法内存在者としての罪惡觀とともに、一行行為の他律性を主張するもののようにあるが、実は決してそうではない。そこには仏教本来の業思想に基づく自律性が明らかに窺えるのである。ただ、自らの罪惡生死流転、無有出離之縁の実存態の自覺のうちに、如何ともなし難い、己れの自由意志を縛りつけ

るところの業力を彼は「宿業」という言葉でとらえたのである。それは、自己の赤裸々な宗教的実存態を如実に露呈せしめられた姿であり、そこに限りなき自己への痛みが表出されているのである。それはまた、自我の根底の全き破れを意味するものといえよう。

以上のごとく、親鸞においては、自己のはからいを以て善惡を分別することは「おほそらごとのかたち」でしかなかった。善惡を能くはからい分別するのは仏知のみである。「聖人のおほせには、善惡のふたつ惣じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御ころによしとおほしめすほどに知りとおぼしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめ」(『歎異抄』)と述べられるのは、人間の善惡の判断が執着心、分別心を離れないものである限り、それは絶対的なものではない。たとえ善と判断したものも如來の絶対善に比するときは、そのまま惡に転ずるよりほかないのである。かかる親鸞の思想は、直接的には曇鸞の『往生論註』の思想によるとされる。すなわち「論註」卷上に「淨土論」の「我依修多羅真実功德相」の真実功德を釈して「真実功德相者有三種功德、一者從有漏心一生不順法性、所謂凡夫人天諸善、凡夫人天果報若因果、皆是顛倒、皆是虛偽、是故名三不実功德、二者從三菩薩智慧清淨業起、莊嚴仏事、依三

法性^ニ入^ル清淨相^ニ、是法^ニ不^レ顛倒^キ、不^レ虚偽^ヲ、名^ヲ爲^ス眞実功德^ト。」と示され、凡夫人天の善はたとえ善であつても顛倒、虚偽なる有漏善でしかない。親鸞はかかる凡夫人天の善を「雑修雑善」とか「人天の虚偽邪偽の善業」「雑毒雑心の屍骸」等と厳しく廢している。『教行信証』『信巻』には「一切群生海、自^ニ從無始^ニ己來、乃至今日^ニ至^ニ今時^ニ、穢惡穢染^ニ、無^ニ清淨心^ニ、虚偽諂偽^ニ、無^ニ眞実心^ニ」「急作急修^ニ、如^レ炎^ニ、頭燃^ニ、衆名^ニ、雜毒、雜修之善^ト、亦名^ニ、虚偽、諂偽之行^ト、不^レ名^ニ、眞実業^ニ、也」といわれる。親鸞が如何に徹底して有相善を否定したか知られるであろう。かかる曇鸞の思想を承けての親鸞の主張は、さらにさかのばれば、すでに原始經典『ダンマパダ』に示されるところである。一二六に「悪をなす者は地獄に、善をなす者は天界に行き無漏の者は涅槃に入る」と説かれるが、天界はあくまで有限相對の善処にすぎず、無限絶対の涅槃界こそ求むべきであるとされるのである。また、「不善」と訳される akusala という言葉には、すでに根源悪 (akusala)・現象悪 (gapa) のみならず、有漏善 (puṇa) をも含むと考えられるのであり、悪のみならず、かかる有漏善をも超越すべきことを説いて「心に執われなく、思い乱れず、善 (puṇa) と悪 (gapa) とを捨て、目ざめた者には、恐れはない」(『ダンマパダ』三九)「うるわしい蓮華の水に染まらないがごとく、あなたは善 (puṇa) と悪 (gapa) との両者に汚されなく」(同五四七)等

親鸞聖人の人間観(菊 藤)

と示されるのである。窮極的に悪の根源としての無明・妄執を断ずることが示されるのである。

かくて、親鸞の徹底した罪惡觀に示される宗教倫理の世界は、仏教本来の思想に基づくものであり、しかも、それが大乘仏教的理念を以て把握されていることは、例えば「罪障功德ノ体トナル、コホリトミツノコトクニテ、コホリオホキニミゾオホシ、サワリオホキニ徳オホシ」(『曇鸞和讃』)等と示されるごとく煩惱即菩提、生死即涅槃、氷水一味等の理念の中に明示されるのである。かかる立場において、いわゆる世間倫理は、それが相對的倫理であれ、哲學的倫理であれ、その実践主体が自我人である限りどこまでも虚妄である。その意味で親鸞の宗教的倫理の世界は容赦なく世間倫理を限りなく、その根源より絶えず否定内省せしめるグルントとしての意義を持つものといえよう。

さて、かかる親鸞の思想のよつて立つ根源こそ本願一乘海であつた。それは「如来清淨の真心をもつて、円融無礙、不可思議、不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて諸有の一切煩惱・惡業・邪智の群生海に廻施したまへり。すなはちこれ利他の真心をあらはす……」等と展開される一切の極惡者を起死回生せしめる根源的世界である。それは「貴賤縋素をえらばず、男女老少をいはず、造罪の多少をとはない」世界である。それは「諸天人民、蜎飛、蠕動の類」

はもとより「逆謗闡提」に至るまでその悪を転じて徳を成ぜしめる絶対救済の活動を生ずる根源的世界であつた。而して、かかる本願海より流出した念仏行こそ「ひとへに他力にして自力をはなれたる」ところの、諸善に超勝せる宗教的絶対価値をもつものであり、まさに一切の極悪なるものを証の世界へ導くものである。かかる世間倫理を超えた宗教的絶対善たる念仏行こそ相對界の一切をして絶対清淨真実界に転入せしめるのである。かくて、「七仏通戒の偈」に示される仏意も、まさに如来の本願海中に浮かぶその中に、自然に獲得せしめられるのである。

二、一般に「七仏通戒の偈」は並列的ないしは段階的に考えられ易い。すなわち、第一に「諸惡莫作」を、次に「衆善奉行」を考え、この兩者を以て廢惡修善を教える倫理的教説となし、第三句「自淨其意」を以て宗教的意味を示すものと解しやすい。しかし、すでに道元が「諸惡莫作」を決して世間倫理の意味にとらえず、無上菩提の内容の一面を示す言葉であるとしたように、親鸞においても眞の仏法としての選択本願念仏の中にその意がすべておさめられていると考えられる。すなわち、道元において「諸惡莫作」は「惡をなすなかれ」ではなく、「諸惡をなすことなし」「作るべき惡莫し」であり「衆善奉行」と表裏一体のものであつた。仏道を学ぶことは、そのまま本来的執着を放下し、只管に仏法のために仏法を学

ぶことであつた。善惡について世間倫理の立場に立つことなく、また己れの主観によつてそれを判断することを強く斥けたのである。親鸞も、眞の仏法としての選択本願念仏の中にこそ惡も惡の働きを消失し、善もその虚妄性を露呈せしめられ、絶対善なる清淨界が具現されることを力説したのである。

最近、仏教乃至眞宗における実践倫理の問題がとりあげられ、それが個々の具体的な現実的課題の解明に対し極めて無力であることが指摘されている。しかし、果して宗教倫理を個々の現実的課題に方程式のごとくあてはめ得るものであろうか。すでに、仏教の倫理は十善、五戒、八正道、六波羅蜜等に示され、特に慈悲行の実践が力説されるのであるが、それも決して形式的なものではなく、どこまでも人間の内的精神に深くかわかるものといえよう。親鸞は、その念仏者としての生涯において、常に内的精神を問題とし、自力善根主義と訣別し、ただ他方念仏の中にこそまことを見出し、自信教人信の実践こそ、常行大悲の益あらしめられる絶対善の道として選びとつたのである。それは、逆惡の者をして起死回生せしめるものであり、自律他律をこえた法の具体的活動のもとに生まれないいわゆる自然法爾的倫理なのである。それはまた、原始仏教における世間倫理の基本思想としての「平等」と「慈悲」と「報恩」の三つを自ら包含するものといえよう。（紙数の都合で、註参考文献を省略させていただきました。）